

道元禪と天台本覚法門に関する一考察

佐々木 俊 道

一 問題の所在

道元禪に関しては、その仏教教理史上の位置付けとして、如浄禪の延長としながらも、宗朝禪を批判し、達磨、六祖への源底還帰を意図したととらえる側面。つまり中国禪宗の範圍で処理する方法。また、日本仏教の範圍で、当時の日本天台本覚法門の批判・超克としてとらえるといったような、主に二つの側面からなされてきた。そして後者に属する最近の成果としては、山内舜雄博士の『道元禪と天台本覚法門』が上げられよう。博士は其中で、本覚法門の諸資料を精査した上で、本覚法門と『眼蔵』とは、そこに類似した表現は見られるが全く異質なもので、教理上無関係であるとされている。よって今回の目的は、類似表現を機械的に洗い直してみようという基礎的作業を試みることにある。またここでは『眼蔵』とともに、その註釈書である『聞書抄』についても同時に扱うこととする。なぜなら、『聞書抄』に関しては、

本覚法門を否定的媒介として『眼蔵』を理解しようとした性格は、鏡島元隆博士によって指摘されているが、それも本覚法門との表現及び字句の類同性が上げられるからである。

二 『眼蔵』と論議の算題

まず手始めに天台の論義書である『百題自在房』と『台宗二百題』の中に収められている算題と『眼蔵』各巻の題とは一致するものを列記することとする。ちなみに論義書を用いる有効性を簡単に触れておくと、論義書の方が口伝法門の文献よりも内容が包括的であり、日本天台側の関心領域を端的に知りうるからである。

鏡像本有のこと―古鏡、夢中実因果果のこと―夢中説夢、法身説法のこと―無情説法、生死始終のこと―生死、優曇華は輪王出世の瑞華なるかのこと―優曇華、如意珠当体のこと―一顆明珠（百題自在房と眼蔵）、法華授記―授記、法華仏性―仏性、羅漢果退―阿羅漢、光明立題―光明、顯密即身成仏―即心是仏（台宗二

百題と眼蔵

以上、とりあえず挙列しておいたが、これをみても、あまり数が多いとはいえない。当初の目的としては、十二巻本以外は、ほとんど一致するのではないか、という期待のもとに行なったのであるが、現在ではそこまで至らなかった。つまり、これは私見であるが、七十五巻本及び拾遺の題名については、内容はともかくとして、日本天台の算題と一致するなら両者は、ある意味で同時代性を有していることとなり、それをあまり有さない十二巻本の方が、道元禪独自のものである等の傍証になるが、現状ではそこまで言えない。

三 「道理」と「所詮」

次に、『眼蔵』の中に出てくる「道理」と『御抄』に出てくる「所詮」という単語が、論義の形式にあてはめると、どのような意味を有するか、考察しうる点を探ってみることにする。『眼蔵』の中で「道理」という単語は、ほぼ全巻にわたって二七二ヶ所に見られる。

以下、主要なものを列挙することとする。

方法のわれにあらぬ道理あきらけし（現成公案、東司上不説仏法の道理を思量すべし（洗浄）、この道理子細に検点すべし（礼拝得髓）、この道理を功夫参究すべし（諸悪莫作）、金銀珠玉にあらざる道理を信受するとき（袈裟功德）、この道理あきらかに仏

祖正嗣の宗旨なり（詞書）、西天諸祖亦如是の道理はやく練磨すべし（古鏡）、かくのごとく道理しづかに思惟すべし（仏経）

等であるが、これにより「道理」の内容が肯定的に扱われていることが知りうる。これに対して、『聞書抄』においては「所詮」という単語が頻出する。しかるにこの「道理」、「所詮」が天台論義ではどのような扱われ方をするのか次に述べることとする。

(一) 重難の作り方

- 1 道理 答の宗に反する道理を述す
- 2 文証 経論章疏を引いてその理を証す
- 3 料簡 講答の引文に反する解釈を施し、また経疏の文を引き自説を証す
- 4 お尋ね 本題に附随する問題を問う
- 5 所詮 結論にして一論の大綱を述す

（『和訳天台宗論義二百題』七〇七）

さらに「所詮」について

所詮は、書きよりのこれあるものの由にて、初心に書きにきものに御座候。それ故、論義を書いて、人に直してもらう時などは、ただ所詮とはかり書いて、自分の料簡これあり候とも、それは書かず頼む人へ書き添えて下されと申して頼むが故実の由にて御座候。（同右六七四）

そして、『百題自在房』については、問者の宗意を決着す

るにあたり「難じてはいくゞ詮じ候ところ、上未」という形式がとられている。つまり、以上の点から、天台の論義における「道理」とは日本天台の宗意に反する道理であり、「所詮」もまた、結論を示す単語であるが、こちらの方は、他の者に修正してもらうことが予想されている言葉であることがわかる。しかるに、この論義で使われる「道理」、「所詮」が、『眼蔵』の「道理」、「聞書抄」の「所詮」と同一であるとするならば、両者の口伝法門批判という性格に過不足なく一致する。さらに『聞書抄』における「所詮」は、くなり。」という部分は一応の結論であって、別の解釈があっても良いことになる。しかしながら、これらについても決め手に欠ける。論義の形式がいつの時代に定着したものか現時点でははっきりしていないからである。多分、『眼蔵』に関しては、的はずれの感否めない。『聞書抄』については「落居」、「不落居」等の論義用語が頻出することからも、これからの研究の可能性を残しているものと思われる。

四 本覚点について

「初縁実相」を「初めて実相を縁ず」と訓むと始覚点となり、「初縁なり実相なり」と訓むと本覚点になり、それぞれに教理的違いを訓点の付け方によって区別することが特に恵心流によってなされてきた。そして『眼蔵』の句作りにこの

道元禪と天台本覚法門に関する一考察（佐々木）

本覚点が多く見出されることが従来より指摘されている。しかし、恵心流の方は、あくまでも始覚点が予想された上での本覚点であって、『眼蔵』においては、本覚点は数多く出て来ても、そこに始覚点が予想されているとはいえない。ところが『聞書抄』では、

不^ス如^{コトナク}三界見^ミ於^ニ三界^{ミヤク}、^{ルカ}宗門には如此心得
不^ス如^{コトナク}三界見^ミ於^ニ三界^{ミヤク}、^{ルカ}宗門には如此心得

『菟書大成』十一・六七八

というように、本覚点を宗門独自の読みとしている箇所がいくつかある。このことから『聞書抄』に関しては本覚法門の側からさらに精査されなければならないと思われる。

五 まとめと展望

以上、道元禪と本覚法門との問題点について、字句と表現の類同性のみを網羅的に示してきたが、さらに、これから教理的裏付けがなされなければならない。特に『聞書抄』以後の宗乗解釈については、本覚法門からの研究が必要ではなからうか。尚、発表後、天台宗典編纂所の野本覚成氏より、御示唆を頂いたが、それについてもこれから鋭意、考慮していきたい。

△キーワード▽ 道元禪、天台本覚法門、天台論義

（駒沢大学大学院）